

聖路加看護学会

ニュースレター

第19回聖路加看護学会学術大会開催にあたって 第19回聖路加看護学会学術大会ご案内
聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金採択者報告 平成25年度学術交流会報告
2014年度「聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金」研究助成採択者 聖路加看護学会誌オンライン投稿システム受付開始 お知らせ 編集後記

●第19回聖路加看護学会学術大会開催にあたって

第19回学術大会 大会長 森田 夏実（東京工科大学医療保健学部看護学科）

「“経験”を語る、聴く、わかちあう」——第19回聖路加看護学会学術大会のメインテーマです。

先端科学技術のおかげで、人間の社会生活は便利になりました。それはワクワクする経験ももたらしてくれますが、いろいろな事がスピーディに進みすぎて、ついに行くのに精一杯という感覚も免れません。

そのような激動の社会の中でも、人間としての様々な経験は、私たちひとりひとりの人格を作り上げ、豊かな人生を編み上げていっているのです。しかし、貴重な経験をじっくりと味わい、語り、聴き、わかちあう、という時間を持ってないのが現実かも知れません。

第19回聖路加看護学会学術大会では、人々の健康と病いに関連する“経験”に焦点を当てて、参加者の皆様が互いにじっくり味わえる時間・空間にしたいと考えています。看護師としての経験を集める看護実践者、人間の身体が発しているメッセージを読み取る看護研究者をお迎えし、看護者として“経験”に向きあうことについての鼎談を企画しています。また、言葉を用いた経験の共有に留まらず、映像を用いて健康と病いの語りをわかちあうことについてもご紹介し、人々の経験を理解すること、経験の理解を通して看護を实践することについて考えてみたいと思います。経験の語りは人々に感動を与えます。今後の医療や看護学におけるエビデンスとしての価値について、教育講演をお願いしています。

さらに、研究発表は全て口演形式とし、研究成果の発表に留まらず、研究プロセスでの研究者の経験などもわかちあえる機会にしたいと考えています。

学術大会に参加する皆様の“経験”が、看護実践・研究・教育に、そして日々の生活を豊かにできる一日になる様、準備していきたいと考えております。多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

●第19回聖路加看護学会学術大会ご案内

会期：2014年9月20日（土）
会場：聖路加国際大学本館（東京都中央区明石町10-1）
メインテーマ：“経験”を語る、聴く、わかちあう

◆プログラム

〈大会長講演〉

「“経験”と“気持ち”」

森田 夏実

座長：松谷美和子（聖路加国際大学看護学部）

〈鼎談〉

「看護者として“経験”に向きあう」

宮子あずさ（公益財団法人井之頭病院）

西村 ユミ（首都大学東京保健福祉学部看護学科）

司会：佐藤 紀子（東京女子医科大学看護学部）

〈シンポジウム〉

「映像による“経験”のわかちあい」

射場 典子（NPO 健康と病いの語りディベックス・ジャパン）

花岡 隆夫（潰瘍性大腸炎患者会 かながわコロソ）

武田 祐子（慶應義塾大学看護医療学部）

司会：井部 俊子（聖路加国際大学看護学部）

〈教育講演〉

「エビデンスとナラティブ：これからの医療と看護を考える」

中山 健夫（京都大学大学院医学研究科

社会健康医学系専攻健康情報学分野）

座長：森田 夏実

〈一般演題 口演発表〉

演題申込方法については、学術大会 HP (<http://www.slmr19.com/>) をご覧ください。

演題締切：2014年6月2日（月）

◆参加費 ＊事前申込は2014年9月5日（金）まで受け付けます。

学 会 員 ￥5,000（当日参加 ￥6,000）

非学会員 ￥6,000（当日参加 ￥7,000）

学生・大学院生 ￥3,000（当日参加 ￥3,000）

◆振込先（郵便振替口座）

口座番号：00150-4-449923

フリガナ：ダイジュウキュウカイセイロカカンゴガツカイガクジ
（郵便局文字上限規定のため途中までの記載）

加入者名：第19回聖路加看護学会学術大会

◆領収書

郵便振込票をもって領収書にかえさせていただきます。

◆お問合せ先

第19回聖路加看護学会学術大会事務局

〒144-8650 東京都大田区西蒲田 5-23-22

東京工科大学医療保健学部看護学科 森田研究室内

第19回聖路加看護学会学術大会事務局

E-mail address : slmr19@sfc.keio.ac.jp

聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金 採択者報告

2012年度の聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金「研究助成」は3名の方が採択され、第18回学術大会にて、その成果が発表されました。本号では、改めて採択者の皆さんに、学術大会の報告を含め、研究の動機、実施において難しかった点、成果を得たときの喜びなどを書いていただきました。

看護実践科学助成金を得て —パッション・マネー・タイム

菱沼 典子（聖路加国際大学看護学部）

2012年度に学会からの看護実践科学助成金を得て、「年代による特徴を反映させた市民向け骨粗鬆症予防のための教材における活用評価」というテーマで研究を実施し、2013年に学会発表を終え、現在論文を本学会誌に投稿中である。

私たちのグループでは、2008年に骨粗鬆症財団から研究助成を得て、年代別（若者向け・家族向け・中高年者向けの3部）の骨粗鬆症予防のパンフレットを作成し、健康相談に使用してきた。今回の研究は、これらのパンフレットが健康相談の場で実際にどのように使われているかを調べ、どういう点で有用か、修正の必要はあるかを検討する事が目的であった。

やりっ放しになっているものをキチンと評価しよう、立ち止まって考えようと言うのは、言うは易く行うは難しいものである。実行には、検証しようという志、資金、時間が揃わないとならない。志がなければ何事も始まらないが、研究計画書を書いて応募するまでは、この思いと研究のノウハウを含めた知識だけで進められる。が、実施の段になると、研究費が最も強力な推進力となる。これには2つの側面があり、研究費で必要なものを購入できる、支払えるという面、もう一つは研究費を得たからにはやらねばならないという強制力、この二つが時間を捻出させ、研究を進ませてくれる。今回もまさにそうであった。

決して多額の資金ではないが、その資金がある事によって面接調査とテープ起こしが実現した。パンフレットを使って説明する看護職と、看護職から説明を聞いた市民の双方から意見を聞くことができ、そのデータに基づいてパンフレット評価し、改善を図ることができた。今、改善した新たなパンフレットが、健康相談で使われている。

健康相談の現場でのニーズから発した研究の成果が、現場に還元され、さらに次の研究が求められ、また現場に還元されるという、実践と研究のリンクを実感するプロセスであった。小さなパンフレット3枚のことでも、研究助成を受けてコツコツと続けることは、看護実践科学にとって大切なことと思い、今後もこの助成制度が続くことを願っている。

最後に研究助成金を配分いただいたことに、感謝申し上げます。ありがとうございました。

ATL を発症した患者の体験

橋爪 可織（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻）

現在、教員として学生実習にかかわっており、自分自身の経験から血液内科病棟を担当しています。血液内科病棟ではいろいろな血液疾患の患者が入院していますが、成人T細胞白血病（Adult T-cell Leukemia: ATL）の患者が多いことに驚かされました。ATLは母乳、胎盤、産道を介した垂直感染、性感染などからウイルスに感染後キャリア化し、キャリアが40歳以上になると、1年間に1,000人に1人の割合で発症すると推測されています。ATL患者は自分が発症したことにより、自分自身の病気や治療に対する不安、死への恐怖を抱きつつ、ウイルス感染を起こすことから、家族に対しても複雑な思いを抱いているのではないかと考え、本研究に取り組みました。

これまでATL患者に関する研究はほとんどなかったため、本研究ではATLという病気に対する理解と思い、病気を発症してからの家族関係の変化、患者や家族に対する思いなどに重点を置いて非構成的面接を

実施し、質的帰納的分析を行いました。対象は5名であり、その体験は、個々の体験の共通性から「避けられない感染へのあきらめと申し訳なさ」、「生きる可能性を信じて苦しみに向かう」、「他者とのつながり」にまとめられました。患者は自分が生まれた時に母親からの母乳感染によってHTLV-1のキャリアとなり、その後数十年を経てATLを発症していました。母親からの感染は患者が生きていくための代償として引き受けなければならなかったものであり、さらに自分から子どもへも引き継いでいる可能性があることから、患者は子どもに対する申し訳なさを感じていました。それぞれの患者が母親を恨んでも仕方がないと自分に言い聞かせているようであり、自分の子どもへの感染を心配し涙ぐむ患者もあり、この研究を通してATLという病気がほかの血液疾患とは非常に異なることを痛感しました。

最後になりましたが、本助成をいただきましたことを深く感謝いたします。

災害支援後の健康維持のためのサポートシステム開発を目的とした災害医療支援者のメンタルヘルス調査

新福洋子（聖路加国際大学）原田奈穂子（防衛医科大学校）

今回助成金を受けた研究は、東日本大震災で災害支援に派遣された医療者のメンタルヘルスを探索する目的で実施しました。オンラインの質問紙調査を行った上で、インタビュー調査にも協力者を募り、量的データと質的データを合わせたmixed methodsを用いて分析をしました。

研究の契機は、東日本大震災にて災害ボランティアとして派遣された際に持った思いにあります。私は派遣前に本学学部長からサバイバーズギルトや災害支援のための準備についてのメールを受け取り、自己学習してから臨むことができました。そのため、心身ともに無理をすることなく、避難所の保健室での業務を行うことができました。それでも、帰任時にどうしても後ろ髪を引かれる気持ちになったり、その後も余震のニュースを聞くと、「自分もまだ一緒にいればよかった」と強く思ったり、引きずっていた思いを緩和するのに時間がかかりました。

アメリカ留学時代に親しくなった本学の先輩でもある原田奈穂子さんも災害支援に深く携わっており、二人で支援経験を共有している中で、派遣された医療者の中には派遣後心的外傷性ストレス障害に悩まされる人がいるということを知りました。今回の震災で派遣された医療者にはこうした障害がなかったのか、あったのであれば適切なケアが受けられているのか、またそうした障害を防ぐことができる派遣のシステムについて考える必要があるという話に発展し、研究する必要性を感じたため助成金への応募に至りました。被災地で長期間活動することが叶わなかった私にとって、この研究を通して震災支援に間接的に関わっているという思いは、私自身が持つ被災地に対して引きずっている思いを緩和する役割も果たしていると思います。

実施に際しては、一民間団体の協力を得てオンライン調査をメール配布していただきましたが、なかなか調査に協力が集まらず、その団体のイベントで印刷した質問紙を再度配布することにしました。オンライン調査をネット上の配信だけで行うには課題があることがわかりました。しかしながら、インタビューにも協力して下さった対象者は、本研究の意義を深く理解してくださり、「本当に自分の支援が役に立ったのか」という思いや、「一年以上経っても思いを引きずっている」といった心の内を語ってくださいました。その方々の思いや、助成金をいただいたことへの御礼としても、結果を論文として世に出すべく二人で執筆を続けています。（文 新福洋子）

平成25年度学術交流会報告

「ナースのストレス——上手に付き合うコツ」

本年度の学術交流会は、講師に聖路加国際病院・精神腫瘍科医長の保坂隆先生をお招きし、9月28日、本学会学術大会終了後、聖路加看護大学301号教室にて開催、約45名ほどが参加した。今回は「ナースのストレス——上手に付き合うコツ」と題し、保坂先生の講義のみならず、新人教育を題材にした二つの事例を用いたグループワークとその発表も行われ、まさに様々な世代・現場の“交流”が実現できた1時間20分となった。

看護の“スタート”、新人としての入職・新しい職場に適応過程において生じるストレスについての二つの事例は、ともに若い看護師が職場に適応できず、



講師によるファシリテーション

次に2例目には“ゆとり世代”の新人が登場する。この世代の新人看護師はその「社会人基礎力」の低下が不適応の背景にあり、職場ではパワーレスになるが離れればパワーが出てくる新しいタイプの抑うつ状態となる。この状況では必然的に指導者側やプリセプターの負担が増えるので、その対応にはソーシャルサポート＝身近にいてその人を支援したり、助けたりしてしてくれる存在のサポ



活性化したところで説明

その指導にあたるプリセプターが悩み、ストレスを抱えるといった内容であった。1例目は新人看護師の不適応に対して、「頑張ろう」で乗り越えようとしたが、うまく新人に伝わらず、やがて燃え尽きていくプリセプターの姿が描かれている。保坂先生は、新しい職場・職種についた時をスタートラインとして、その後、過剰適応段階・神経過敏段階・無気力段階・引きこもり段階・抑うつ段階・行動化段階に進むと説明した。それぞれの段階を的確にとらえ適切にサポートすることで抑うつや無断欠勤などの行動化の段階に至ることを予防できる。



話し合いからスタート



ともに考える

ートの活用が重要で、保坂先生はソーシャルサポートを情緒的・道具的・情動的の三種類に分け、いずれも必要だと述べた。サポート役はプリセプターだけではなく、そのサポート内容に適した先輩や同期、上司や友人など複数で行うことが今後の世代へのサポートになるのである。

今後の新人教育、さらには職場での人間関係構築の課題解決に多くの示唆を与えてくれた。
(学術交流委員)

◆ 学術交流会にご参加ください！ ◆

学術交流委員会は、学術的な交流の場を会員の皆様に提供する活動を行っております。2013年度の交流会は、報告にあったとおり、新人ナースの適応困難事例について受講者同士で話し合うことから始まりました。新人ナースの反応をどう考えればいいのか、彼らの生きてきた時代背景からストレス反応の特徴について学びました。講師からは新人の反応に悩むプリセプターナースの世代特性についても同時に解説していただき、他者理解とともに自己理解の深まるひと時でした。このような理解によって、ストレスに疲弊することなく開放されることを実感できました。

さて、2014年度は、第19回聖路加看護学会学術大会との同日開催を企画しました。起業をお考えの皆様、必聴です。

「看護職が行う起業と看護の可能性」

講師：福田 裕子（まちのナースステーション八千代、管理者）

日時：2014年9月20日（土）17:00～

場所：聖路加国際大学 本館 教室

講師の福田裕子さんには、まちのナースステーション八千代を立ち上げたご経験から、訪問看護ステーション開設のプロセス、開設後の状況、経営上の課題や、在宅ケア領域の起業に関する最新情報をお話していただきます。

詳細はホームページをご覧ください。こちらは学会員に限らず、どなたでもご参加いただけます。交流の場から明日へのエネルギーが生まれることを期待しております。

2014年度「聖路加看護学会看護実践科学助成基金」研究助成採択者

今回の研究助成採択者は、以下の3名でした（助成金総額20万円）。

有田 美和：ダウン症候群児・家族と看護学生を含む専門職との協働の取り組みに参加したダウン症候群児・家族、看護学生、専門職の体験について

五十嵐ゆかり：産科救急チームトレーニング評価におけるパフォーマンス測定尺度の開発

三森 寧子：初任期養護教諭が成長するプロセスとその要因

看護実践の向上と看護学の発展に寄与することを期待します。研究助成情報については、適宜、ホームページにアップします。

聖路加看護学会誌オンライン投稿システム 受付開始

2014年4月1日から「聖路加看護学会誌オンライン投稿システム」で投稿の受付をしています。論文作成時には、聖路加看護学会「オンライン投稿システム」のページ（図）で「新規投稿」からシステムにアクセスします。システム内にupされている「論文作成フォーマット」をダウンロードしてご利用ください。新しい投稿規定、オンライン投稿・査読システムの利用法については、聖路加看護学会誌17巻2号（2013年1月31日刊）で詳しくご案内しています。どうぞ、ご参照ください。



▲「オンライン投稿システム」のページ
<http://slnr.umin.jp/regulation/onlinetoukou.html>

お知らせ

★学術交流委員会

2010年度に開始された「聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金制度」も早5年目を迎えました。これまで延べ17名の方が研究助成を受けられ、当該学術大会で発表されました。2014年度の助成対象者が新たにこれに加わります。現在は学会誌への投稿も義務付けられていますので、この制度が研究推進、論文発表の励みになっていることを確信致します。会員の皆様、是非この制度をご活用ください。今から入会されますと、次期のご応募が可能ですので、周囲の皆様にも宣伝をよろしくお願いいたします。

（担当理事：松谷美和子・佐藤エキ子）

★庶務

新しい年度を迎えました。勤務先（所属）、住所、電話番号、メールアドレスの変更がありましたら、学会事務局までご連絡ください。只今、一般社団法人化に向けて、定款案の検討をしています。今後、ホームページに掲載予定です。皆様のご意見をお待ちしています。また、今年度は選挙が実施されます。会費納入、投票等、皆様のご協力をお願いいたします。

学会事務局連絡先：E-mail address：slnr@slcn.ac.jp

Fax（大学代表）03-5565-1626、郵送可。

（担当理事：森 明子・佐居由美）

★学会誌編集委員会

上記のとおり、2014年4月1日から「聖路加看護学会誌オンライン投稿システム」で投稿を受け付けています。次の投稿期限は2014年5月末日です。会員の皆様からのたくさんの投稿をお待ちしています。

（委員長：亀井智子）

★会 計

2013年度の会費納入率は78%でした。皆さまのご理解とご協力に感謝申し上げます。

まだ2013年度の会費納入がお済みでない方は、本年度分と併せて納入してください。本年度の会費納入振込用紙については本年度が選挙が実施される年度であるため、通常よりも早く1月に送付しております。振込用紙が新たに必要な方がございましたらお申し出ください。また会費の納入についてご不明な点は事務局にお問い合わせください。

【振込先】郵便振替口座：00100-8-670371

加入者名：聖路加看護学会

（担当理事：井部俊子・佐藤直子）

★高度実践看護開発検討委員会からのお知らせ

この委員会では、看護系学会等社会保険連合（看護連）の研究助成金を得て、専門看護師による看護外来実施に関する実態調査を行いました。これからの時代、医療機関では外来の機能の充実が重要課題となっているなか、専門看護師が外来で展開している看護に焦点を当て、その実態を知ることが目的としました。

アンケート調査の結果では、回答した399名の専門看護師の内、看護外来として看護師が主体的に外来を運営していたのは27.2%であり、がん看護関連（39%）が最も多く、次いで糖尿病看護（21%）フットケア（19%）の順でした。

外来における看護については、一部診療報酬で評価され始めていますが、その評価が活用されている場合と、未評価ではありますが、必要な看護として実践されている場合とがありました。詳細は学術大会等でご報告したいと考えていますが、その後聖路加看護学会として外来における看護機能をどのように診療報酬等の制度に乗せていくのか、会員の皆様との交流を通して意見集約に努めたいと思います。

（委員長：山田雅子）

編集後記

今回はニュースレターの発行が遅くなり申し訳ありませんでした。そのために、第19回学術大会の演題登録の締め切りを6月2日（月）まで延期していただきました。本号でお伝えしましたとおり第19回学術大会は魅力あるプログラムとなっています。演題登録も、どうぞ、よろしくお願いいたします。（ニュースレター委員会）

●発行：2014年5月7日 ●編集：松本直子 飯岡由紀子 小山真理子 ●印刷：（株）イーフォー
●連絡先：聖路加看護学会事務局 〒104-0044 東京都中央区明石町10-1 聖路加国際大学内
電話 03-3543-6391（代表） FAX 03-5565-1626（代表） HPアドレス <http://slnr.umin.jp/>